

# ソシュールにおける共時態と通時態の峻別について

松澤和宏  
(まつさわ かずひろ)

歴史言語学全盛の時代に共時と通時の区別を説き、共時的研究の優先を主張したとされるソシュール。しかし、通時的視点が排されたわけではなかった。話す主体としての人間の問題も包摂していた彼の言語観を再検討する。

ソシュールが説いた共時態と通時態の峻別は、弟子のバイイとセシユエを編著者とする『一般言語学講義』（以下『講義』と略記）の受容を通してもっぱら方法論上の問題として受け止められてきた。共時／通時の截然たる区別を越えて文法化の問題に取り組もうとする近年の歴史言語学の潮流のなかでは、方法論的峻別の背後に控えているソシュールの言語観そのものは置き去りにされているように見受けられる。

## 一 「文法の歴史」をめぐるソシュールの考察

一九〇八年から一九〇九年にかけての第二回一般言語学講

「うか。すなわち、共時態に帰属していたすべては、サンタグムもパラディグムも、自分の歴史を持つてはいないでしようか。純然たる史的音声学の外に一步出るやいなや、境界線を引いたり根源的な対立を断言することは實際にはるかに困難になります。(IIR 115) (傍点は引用者)

因みに『講義』(九六頁)では、引用文中で傍点を付した一文が削除されている。後述するように、実は類推現象こそ共時態と通時的变化が交錯する場面の一つかである。第二回講義の続きを読む進めてみよう。

ソシュールはついで「しかしながら、文法的と思われている事象が史的音声学の事象に帰着するというケースが数限りなくあります」(IIR 116)と指摘していくつかの例を挙げている。古ドイツ語の合成語 *beta-hūs* (祈りの家) では、末尾母音が音声変化の結果脱落して *beta* が *bet*となり、*beten* (祈る) という動詞と関連付けられるようになり、Bethaus は「祈るための家・(ユダヤ教の) 礼拝堂」の意味になつた。したがつてこの変化は音声変化に起因する通時的な事象ということになる。またラテン語の曲用のロマン語化について、語末音の混同という音声変化がまず生じて、その

義で、ソシュールは史的音声変化は文法的ではないがゆえに通時的なものであり、文法的なものは共時的なものであるとしたうえで、いわゆる文法化に関わる問題に触れている。

しかしながら、音の歴史以外に書かれるべき歴史ははたして存在しないのかどうか、またわれわれは再び文法的な主題に引き戻されないかどうかという問い合わせすぐに立てられることは明らかです。例えば、或る語が意義を変えたり、両数の形態のように或る言語において形態が少しずつ廃れていくという事象はないでしょうか。あるいはまた、類推的な発展という事象は存在しないでしょ

結果単純化された曲用が形態論的文法事象として確立されたと説明している。さらに連<sub>サンダム</sub>辞の例として、古フランス語の *prendre-ai* が、*prendr-ai*へ変化を遂げた未来形の例をとりあげて、*prendre-ai*には一つのアクセントがあるが、*prendrai*には一つしかなく、この変化は音声変化であると説明している。ソシュールは、史的音声学がこのようにつねに通時的变化に介入していくことを述べた後に、「文法の歴史」に言及している。

文法の歴史を正当化するように思える残余があり、そこに難しさがあるということをソシュール先生は、認めないのではない。すべて文法的なものは或る一つの状態に関連していなければならぬので、或る文法的事象が時間のなかで歴史をもつと言ふことは矛盾なのです。純粹に史的音声学的なものではないものを事象の進化といふいう问题是明白ではありません。そこにはなにか単純ではないものがありますが、史的音声学がそこで或る役割を果たしていることでしょう。(IIR 118)

文法の歴史をめぐる問いは、共時態と通時態との单なる二分法によつてあらかじめ封殺されてはいない。ソシュールが

「文法の歴史を正当化するように思える残余」のなかに「なんか単純ではないもの」があると述べているのとは対照的に、『講義』では「この講義の枠組みとは相容れぬものである」(100頁)として問題をあらかじめ回避している。ここにもソシユールと『講義』の懸隔の一端を窺うことができる。

## 二 主観的分析と客観的分析

ソシユールは錯雜とした「文法の歴史を正当化するように思える残余」のなかに分け入り、炯眼をもって、音声変化がまず介在し、その帰結として新たな文法＝共時的事象が生じてくる機制を下図のように整然と図示し説明している。

横線は共時の状態を、縦の矢印は史的音声変化を指している。この二つの方向がどこまでも異質であるというところに、ソシユールと「文法化」を唱えたマイエ等との決定的な相違がある。

ところで、共時態と通時態との峻別は、当時の歴史言語学者の混乱を糾し、史的音声変化と形態論的交替の識別を梃子に言語事象を整理分類するための单なる方法論に留まるものではなかった。この識別をソシユールが決して手放そうとはしなかつた理由は、方法論を越えた問い、すなわち方法論が

目指す対象である言語とはなにかという問い合わせた。ソシユールは言語を対象にするといふことが一筋縄ではいかないこと、言い換えれば言語を対象として指定する操作＝観点をめぐるプロブレマチックを、ソシユールは主観的分析と客観的分析の識別という形で提示している。この二つの分析の識別に関する最も平易な説明は、第一回講義の第二章「類推的変化」のなかに読まれる。主観的分析とは、或る一時期の言語を話者の意識に即して分析するものであり、客観的分析とは、隔たつたいくつもの時代の言語状態を同一平面上に並置して通観する言語学者の分析のことである。前者が共時言語学を、後者が通時言語学をそれぞれ支えていることは言うまでもない。ソシユールは次のような巧みな、しかしまだ問題含みの比喩を用いている。

語はこれまでに頻繁に間取りや用途が次々と変更されきた一個の大きな建物のようなもの。もし紙の上に、間取りの継起を平面図に書くと、この一覧表的通観は客観的分析に該当するでしょう。この家に住む者にと

「この家に住む者」＝話者の意識は、「つねにただ一つの間取り」＝言語状態しか知らず、遙か昔の時代の言語を知ることも参照することもない。ここで肝要なことは、幾世紀にもまたがる言語変化を俯瞰し比較する主体は言語学者ではあっても、特定の時代を生きるほかない具体的な「話者ではない」という点にある。そのような長期にわたる言語変化を体験し意識化した話者などこの世に一人として存在したためしがないのである。

なぜこうした観点の差異がソシユールにとって決定的な重要性を有していたかと言えば、言語とは話者を離れてはそもそも存在しないからであり、話者と独立に客観的に存在する所与や実体ではないからである。とすれば、各時代の言語を比較し文法化を察知する言語学の主体は具体的な話者とはかけ離れた、きわめて人為的な操作を行っていることになる。文法の歴史の可能性に対しても、ソシユールがきわめて慎重であったのも、言語を話者と切り離して扱うことが、言語を言語ならざるものに変じてしまうと考えていたからなのである。

ソシユールにおける共時態と通時態の峻別について

す軸は「同時代性の軸」*axe des contemporanéités*と呼ばれているが、『講義』(一一二頁)では「同時性の軸」*axe des simultanéités*に書き換えられている。すなわち『講義』では、古典物理学的客觀性の外見を共時態に与えているが、ソシユールは話者の意識に即して一定の厚みをもつた「同時代性」を考えていたのである。

### III 共時態における類推的創造

『講義』の編著者による重大な改竄的編纂の一つは、ソシユールの共時言語学から類推的創造という「言語創造の一般原理」を除外したことにある。ここでは類推について詳述する紙幅の余裕はないが、この類推的創造のメカニズムは、いわゆる第四項比例式  $A:B = A':X, X=B'$  によって示される。すなわち、第一回講義でソシユールが挙げている例では、ラテン語の「演説家」の対格 *oratorem* と主格 *orator*との関係が、「名讃」を意味する対格 *honorem* と主格 *honos*との関係に類推を及ぼして *honos* の傍らに新たな語形 *honor*が招来されてくるという事態である。むつとも類推現象を第四項比例式で説明すること自体はソシユールの独創ではなく、すでに青年文法学派のパウル『言語史原理』(一八六〇年)のな

きかまわりくどい言い方で説いている。<sup>(3)</sup> 類推は、共時態が刷新の萌芽を自らの裡に藏していることを余すところなく示している現象なのである。ところが、主観的分析という観点との関連で捉えることのできなかつた『講義』の編著者は、類推をなんと第三部通時言語学のなかに組み込んでしまつた。共時／通時の峻別は、主観的分析／客観的分析のどちらの観点をとるのかによるのである。『講義』の編著者は、この二つの分析／観点に関する部分を、「第一部と第三部への補説」を付して、そこに閉じ込めて処理しているが、そうした杜撰な編輯は、二つの分析の峻別に込められたソシユールの実証主義批判に理解が及ばなかつたことを歴然と示している。

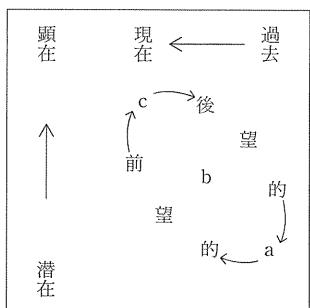
### IV 言語の実体化に抗して

パリ時代のソシユールの弟子にあたるマイエはその一九一二年の論文「文法形態の発達」のなかで、類推を音声変化とともに史的変化に属する現象として自明のように見なしたうえで、三番目の現象として文法化を挙げている。フランス語の *être* 動詞が助動詞という文法的要素に次第に変化していくことを示す例を挙げながら、マイエは独立した単語が文法要素へ移行する変化を初めて文法化と命名したのである。メ

カにも読まれる。しかしパウルが類推をもつぱら歴史的変化として音声変化と同列に位置づけているのに対し、ソシユールの洞察の深さは、「類推的創造は文法的なものである、すなわちこの種のいかなる操作も語形間の関係の理解を前提としている。」(R.2.19) とこうように、類推が話者の意識に依拠した主観的分析によつてはじめてその輪郭を鮮明にしてくる共時的現象であることを看取していたことにある。共時態のなかに身を置いている話者の意識には既成の語形 *honos* の一時的忘却や新たな語形 *honor* の定着の予見が添えられていて、生動、すなわち生きて、したがつて生みつつ動く性格が具わっている。話者の意識には、語形の関係をめぐつて類推的解釈を施す自由な余地と時間性が確保されていて、平板な「同時性」とは一線を画している。話者の意識において既成の語形が新たな語形と共存競合しているという点において、類推的創造は、生じたものを消し去るという史的音声変化の巨大な捨象力とは鮮やかな対照をなす。音声変化の実現する変形、置換とは異なり、類推的創造はあくまでも競合的共存という共時性の裡にあることを学生に理解させようとして、ソシユールは「類推的創造が変形ではないにもかかわらず、類推現象は言語を変形する力である」(R. 2.18) といふ

イエが文法化という問題の発掘を通して、通時言語学の肥沃な領野を拓こうとしたことは確かに評価に値しよう。しかしそこにはソシユールが危惧を抱いていた陥穽が潜んでいる。ともまた事実である。言語をシリライヒャーのように生物学的有機体のように捉えるにせよ、青年文法学派のように機械論的に捉えるにせよ、いずれの場合にも言語は変化をその裡に藏した自己展開する——ソシユール自身がしばしば使う用語を踏襲するならば——実体 *substance* として捉えられることになる。観点をめぐるソシユール的問題意識が継承されなかつたとすれば、マイエが十九世紀の歴史言語学者と同様に、言語を実体化する実証主義の埒内に留まっていたのではないかという疑念を呼び起こさずには措かない。話者の共時的意識が通時的な変化に飲み込まれるように合流し、そこに解消されてしまうならば、言語は話者から切り離されて、一定の法則性をもつて自己展開する超越的な実体として、「神秘的な、あるいは特別な、または歴史に由来するところの、なんらかの本質を賦<sup>(4)</sup>」(ELG, 229) われてしまう怖れがある。この言語の実体化という歴史言語学の弊を免れるために、ソシユールは前望的観点と後望的観点の識別に意を払うことになる。前望的観点とは時の経過に従つて言語の歴史に関する

る事象すべてを遗漏なく総合しようとする理想的な観点であるが、実際には実現不可能なことと言わざるを得ない。後望的観点とは時の流れを遡って言語の歴史を分析していくものである。或る時代に身を置いて、その言語状態を生み出したより古い時代の言語の復元へと分析的に遡行していく。「前望的観点に到達するためには、後望的な観点をまずは通過することを余儀なくされます。言語学者の仕事全体がまずは後望的なのです」(IR 3.13)。現在から遙かなる過去へ遡行するこの後望的観点に優先権が与えられていないと、過去から現在に至る前望的観点は歴史をそのまま再現しているような様相を呈してくる。これを図示すれば下のようになるだろう。



$a \rightarrow b \rightarrow c$  という前望的なプロセスは過去から現在に至る歴史的な過程であると同時に法則性の実現過程としても意義をもつ。伝統的な哲学用語を使えば、潜在的な質料が形相として現実化する過程としても意義をもつことになるだろう。過去より現在に至る歴史的な展開と潜在的法則の顕在化<sup>II</sup>実現という論理的な展開が重なることになり、言語は歴史を通して一定の法則性をもつて自己を実現していく実体<sup>II</sup>主体と化してしまうのである。こうした言語の実体化を回避するには、過去 a から現在 c へ向かう言語の歴史を語る前望的な観

を営む言語的存在の幻想に一度ならず屈してしまったからである。最も難しいことは（中略）このときには反対に観点 A に根本的に留まり続いているのだということを理解することである。それは A 次元の用語を使用しているというただその事に拘つてそうなのである。仮に B に従えば A 次元という概念自体がわれわれから逃れてしまふであろうから。

(ELG, 23-24)

ここで二節で引用した家の例に立ち戻るならば、それが言語の二重性の比喩としては実は不十分というよりもむしろ不適切でさえあることが明らかになるだろう。なぜなら間取りを変えた家に住み続ける者がいない以上、異なる間取りの家をそもそも同じ一軒の家として同定することは誰にもできない筈であるから。言い換えれば、この例はあらかじめ同じ建物（＝観点 A）という前提から出発していたのである。ところが、ソシユールがこの比喩を通して、この比喩を超えて言わんとしていたことは、歴代の住民（観点 B）にとつてはただ一つの間取り（B）しか存在しないということなのである。しかし B から見た A は依然として A に過ぎない。なぜなら A（同じ建物）という用語をすでに使っているからである。もし B の観点に真に立っているならば、A という概念自

点が、言語学者の身を置く場所的現在 c から出発して過去 a へ遡行する後望的分析にあくまでも先立たれ媒介され率制されていなければならぬ。こうして各時代の共時態をあくまでも基にした通時態を構想されるのである。

ここではソシユールが共時／通時の二重性の究明の果てにどのような隘路に逢着したか、一九九六年に発見された自筆草稿のなかから、それを示す一節を掲げよう。

或る種の対象を名付け、観点 A を委ねた後で、その対象は A 次元においてしか絶対に存在しえず、A 次元の外では輪郭を画定されたものでさえないのである。その後で、A 次元のこの対象が B の側から見られた場合には、どのように現れるのかを見るることは（ある種のケースでは）許される。

この場合人が身を置いているのは、観点 A なのかそれとも観点 B なのか。通常は、観点 B に立つておられるという返答がなされることだろう。なぜなら、人は独立した生

体が存在する余地がないのである。共時（B）と通時（A）という共約不可能な観点の差異を超えて、相異なる両者がまさしく同じ一つの言語であるという断定は、いかなる観点に依っているのか。ソシユールの逢着したこの問いは、久しうにわたつて『講義』によつて遮蔽されてきたとはい、未だ返答を得ていられない。

【注】

- (1) 引用に当たっては便宜上、岩波版の頁数を記しておくが、訳文は原文に即して訳し直している。
- (2) ソシユールの第一回講義、および第二回講義からの引用はリードランジェの聴講ノートにより、それぞれ IR, IIR と表記し、その後に頁数を記した。
- (3) もっとも第一回講義の続き (R 2.15) ではソシユールは類推を通時的領域にいれしており、若干の混乱が認められる。しかし第二回講義では類推的創造は共時態に属すると次のように明言されている。「変化があるとすれば、私たちは通時的なものなかで動いているのだろうか。それこそ共時態と通時態の識別において慎重を要する問題点だと言わなければなりません。類推を生むためには、共時的現象が、言語の全体が、体系が必要なのです」(R 100)。
- (4) *Écrits de linguistique générale*, Gallimard, 2002. からの引用は ELG と略記して頁数を記した。
- (5) 以下の拙稿を参考していただければありがたい。松澤和宏「テリダからソシユールへ——音声中心主義の行方」、『思想』(岩波書店) 2003年1月号。

(名古屋大学文学研究科／フランス語学・文学)

ソシユールにおける共時態と通時態の峻別について